

「大東京復興双六」に見る 関東大震災後の未来予想図

木 下 巴 月

Hazuki Kinoshita

神戸学院大学大学院

人間文化学研究科地域文化論専攻

要旨：本稿は、関東大震災後、社会がどのように復興に向けて変動していったか、文化的には震災の影響はどのようなものだったのかを、「大東京復興双六」に見られる未来予想図から考察することを目的とする。

1923（大正 12）年 9 月 1 日に、関東大震災が発生した。発災後には、内務大臣後藤新平のもと、復興計画が策定されていった。区画整理や幹線街路の整備、公園や復興小学校の建設が成果として挙げられ、公益団体であった同潤会による住宅の整備なども、復興を後押しした。

こうした社会の動きの中、震災から 2 年目を迎える 1925（大正 14）年、雑誌『良友』の新年号付録として発表されたのが「大東京復興双六」である。

本稿では、当時の復興計画やそれに伴う社会の動きを文献から追い、「大東京復興双六」の発表元である雑誌『良友』を含んだ大正時代の童心主義との関連も考慮する。当時の人びとが思い描いた「復興」の未来予想図を、子どもの遊びであるすごろくの描写から明らかにすることができると考える。

キーワード：関東大震災、すごろく、童心主義、遊び、子ども

はじめに

1923（大正 12）年 9 月 1 日、関東大震災が発生した。発災後には、デマによって多数の朝鮮人・中国人に対する殺傷事件が多発し、日本の災害史上類を見ない「人災」の伴うものとなった。

本稿はこの関東大震災以後、社会がどのように復興に向けて変動したか、震災の影響が文化的にはどのようなものであったかを、「大東京復興双六」というタイトルのすごろくから考察することを目的としたものである。

本稿における「すごろく」は、紙に絵を印刷し、サイコロを振った数だけコマを進めることでゴールを目指す遊びのことを指す。こうしたものを「絵すごろく」と呼び、その研究は増川宏一や舩田静代によって詳細なものが残されている。増川は絵すごろく全体を総括し、日本だけでなく世界にも視野を広げ、その発祥を追い、すごろくという遊びのもつ性格をまとめあげた¹⁾。舩田は江戸時代の絵すごろくを中心に、その発展や種類などを文化的背景と絡めながら研究した²⁾。しかしながら、これらの先行研究においては、震災や戦争といった社会的動態に対しての反応は、最小限に収められており、どのよ

うなすごろくが発表されたかなどは明らかにされるが、すごろくが社会的動態から与えられた影響などを深く考察したものはない。そのため、本稿ではこれらの先行研究から欠落した「社会的動態からの影響」を考察し、補完することを目的としている。

また、本稿では主に大正期の子ども向け雑誌や児童文学雑誌など、子どもたちの文化活動を考察の対象とする。近代で発表されたすごろくの多くが、雑誌などの付録であったことから、こうした雑誌に関する情報は、すごろくを研究する上で無視することのできないものである。滑川道夫によれば、大正期後半、大正デモクラシーの影響を受け、児童尊重の気風が起こった³⁾。1918（大正 7）年には鈴木三重吉が雑誌『赤い鳥』を創刊し、この児童文芸誌を中心に、児童芸術運動が展開した。本稿で取り扱う「大東京復興双六」もまた、小学校低学年向けの雑誌『良友』の付録であった。

震災が文化に与えた影響を考察するうえで、参照すべき史料は雑誌や新聞など多くのものが存在する。しかし、すごろくという遊びには「スタート」と「ゴール」が明確に設定され、この構造が、関東大震災というスタートから、復興を成し遂げた東京というゴールという、本稿で取り扱うすごろくにも適応される。すごろく

の内容を見ることで、当時子どもたちに対し、未来へどのようなビジョンを抱かせるかという、製作者側の意図などを見ることが出来ると考えられる。すごろくの内容を考察することで、未曾有の災害に見舞われた人々が、その後どう生きていくかという問題に対して、答えを出していく過程を、すごろくという遊びの中にある仮想現実に見ることができる。

本稿は全3節で構成される。第1節では関東大震災とその後、子どもたちを取り巻く環境がどのようになっていったか、復興に際してどのような変化が起きたかを追う。第2節では、主に大正期の子どもの文化や、児童文学雑誌などにみられる「童心主義」について把握することを目的とする。第3節では、「大東京復興双六」にみられる復興後の未来予想図や、そこから大正期の日本の文化と、関東大震災がそれに与えた影響とはなにかを考察する。

第1節 関東大震災とこどもたち

1. 関東大震災

関東大震災における死者の数は10万5385人、被害を受けた家屋の総数は37万2659棟である⁴⁾。被害総額は地震による直接的な損失だけで55億円、あるいは100億円以上とも言われ、当時の国家予算の4~7倍という推定がある。

2011（平成23）年に発生した東日本大震災において、死者、行方不明者、避難生活などで亡くなった「震災関連死」を含めた総数が2万2000人とされる⁵⁾。関東大震災の10万人以上という死者数は、日本の経験した地震による災害の中でも群を抜いていると言えるだろう。また、正午すぎに発災した関東大震災は、昼食時だったこともあり薪などの使用率が高く、同時多発的に火災が発生、死者の多くが火災によるものであった⁶⁾。

さらに、朝鮮人や中国人に対する悪質なデマが広まったことで、軍や自警団員が朝鮮人・中国人を殺害するという事件が多発した。これらの事件が後に子どもたちにも影響を与えている。

このように首都圏を中心に、関東に大きな被害をもたらした関東大震災だったが、その影響は子どもたちにも当然及んでいた。こうした関東大震災下の子どもたちが受けたストレスと、それに対するケアについては加藤理の研究に詳しい⁷⁾。

2学期の始業式を終え、帰宅していた子どもたちが家庭で被災し、その恐怖は深く心に刻まれることとなった。被害を受けた小学校も多く、倒壊や焼失によって校舎が使えず、子どもたちも家や親、学用品などを失い、

支援が必要な状態であった。また、子どもたちを災害ストレスから守るために、ケアを目的としたコンサルテーション活動の必要性を、倉橋惣三が述べている。学校の授業が再開されると、震災前とは違う言動をする子どもたちに、大人たちが注目していた。その中には「自警団ごっこ」と称し、中国人や朝鮮人が殺傷されたことを真似する事例もあった。甘粕正彦の無政府主義者殺害に関しても、これに関係した遊びを行い、悪い遊びだと評する記事もあったという⁸⁾。

こうした状況の中、ケアのためにさまざまな文化活動が行われた。活動写真の上映再開や、罹災児童を対象にした慰安会、娯楽場や遊び場の復興、図書館系の施設の再開など、多彩な文化活動が実施された。特に、読書に関する活動は活発であり、東京でも震災発生後、罹災者のために東京市営バラックで図書室が設けられ、日比谷図書館では新聞や雑誌の閲覧などが行われた。子どもたちは、アラビアンナイトやガリバー旅行記などを閲覧しているが、児童向けの雑誌のみならず、大人向けの書物から選んで備え付けられたものを読んでいることもあったようだ。これには、被災児童の心理状態の変化の影響が考えられている。そしてなにより、『赤い鳥』などに代表される子ども向け雑誌でも、震災後には特集が組まれ、震災体験談や震災関連の特集を組み、掲載している⁹⁾。

2. 復興への道

文化的な復興が各所で目指されていく中、政府もまた東京のいち早い復興を目指し行動していた。関東大震災発生当時の総理大臣は山本権兵衛である。前任の加藤友三郎が、1923（大正12）年8月24日に病没し、後任の山本権兵衛が組閣交渉に苦戦していたおりの災害であった。非常事態を受け、山本は震災発生の翌2日に組閣を終え、臨時閣議では治安維持、被災者の救護や食料配給、必要物資の挑発などが決定された。内務大臣官舎に臨時震災救護事務局が設置される。この事務局は救援救護、もしくは震災復興を目的とした国家的な臨時機関であり、内務省を中心に官吏500~700名が現職のまま、事務局員として実務に携わった¹⁰⁾。

内務大臣となった後藤新平は、東京市長時代に大胆な東京市政改革で実績を上げていた¹¹⁾。この時に、東京市政要綱（のちに八億円計画）と呼ばれる東京の大改造計画を立てており、1922（大正11）年にはニューヨーク市政調査委員会のチャールズ・ピアードを招聘して東京の調査を行い、『東京市政論』という形でまとめた。後藤は9月6日に「帝都復興の議」をまとめ、震災の被害は言うに忍びないが、これを理想的な帝都建設のための

絶好の機会とした¹²⁾。後藤は復興のための独立機関の設置、復興費の国庫負担原則、罹災地域の土地をすべて買い上げ、土地整理を行うことを提案した。後藤の意見に基づき、復興審議会と復興院評議会が設置され、審議会の委員には枢密顧問官伊東巳代治や、「日本資本主義の父」と評される財界人・渋沢栄一、高橋是清などが任じられた。さらに、震災発生後にビードから後藤に向けて「新街路を設定せよ、街路決定前に建築を禁止せよ、鉄道駅ステーションを統一せよ」と電報が打たれ、来日したビードは復興計画策定を応援した¹³⁾。

しかし、後藤の復興プランは計画規模が大きすぎることから伊藤巳代治の反発を受け、当初の41億円という予算は縮小され、約4億6千万円になった。また罹災地域の土地買い上げも財政的な観点から頓挫し、区画整理方式によって公共施設用地を確保するという形になるなど、後藤の復興方針は計画が進むにつれて骨抜きにされた¹⁴⁾。

復興計画は、震災前の施策や都市形成の課題、計画技術などを引き継ぎながら、新しい工夫を施しつつ固められていった。後藤は、最初の段階では都市復興のみならず災害救護、生活・産業の復興まで国が直轄で行うという発想であったが、先述のように財政や諸勢力との関係の中で、帝都復興院の仕事は「焼け跡の市街地復興」に限定され、東京市などが多くの事業を負担して展開されることになった¹⁵⁾。

3. 復興支援に動くひとびと

テレビやラジオが普及していなかった当時、震災の被害を受けた関東の様子を伝えたのは新聞だった。新聞報道を受け、全国各地で支援活動が動き始めた。2日に戒厳令が敷かれた後、3日から地方師団が集められ、5万人に及ぶ陸軍兵士と、医療救護の空白を補うために衛生班による2万7千人弱が投入された¹⁶⁾。また、各地から義援金が送られており、皇室からの恩賜金を含めると7000万円を超える規模となっている¹⁷⁾。全国でも大阪府は飛びぬけて高額な義援金を送っており、罹災した小学校に対し、学用品や教授用具なども支援している¹⁸⁾。民間団体による義援金の募集は、大阪朝日新聞社・大阪毎日新聞社聯合と、貴族院議長徳川家達を会長とした大震災善後会によるものがある。善後会は被害各県に総計310万7千円を送り、罹災者救護の社会事業団体にも100万円を超える支援を送っている。新聞社は義援金を募集し、その資金で物資を購入。約129万7千円の支援物資を計6回、被災地へと送付し、臨時震災救護事務局を通さず直接配給した¹⁹⁾。

公的機関だけでなく、民間の団体でも、首都圏内外を

問わず支援が広く行われた。代表的なものを挙げるとするならば、罹災地区に住宅を供給するために作られた同潤会によるものが挙げられるだろう。それ以外にも、現在のボーイスカウト日本連盟が、震災後に被災した子どもたちの支援の一環として、「野外少国民学校」を開設している²⁰⁾。野外少国民学校では、主として被災者たちが集合しやすい場所を選び、日比谷、九段、浅草、芝野、深川、大塚の6か所に開設され、10月初頭に本来の学校が再開されるまで約2週間実施された。午後1時から3時までの2時間を授業時間とし、授業料は無償、学用品に関しては少年団日本連盟から贈呈することとなっていた²¹⁾。主な活動としては、唱歌を歌う、自分が見聞し、感じたことを文章で表現する綴方に取り組むといった学校でも行うような授業から、歯科医による治療、児童の理髪、蓄音機を聞かせるといったことが実施された。学用品以外にもタオルなどの生活必需品、彼岸の中日には子どもたちにキャラメルを配布していた²²⁾。

関東大震災の復興に関する動きとしては、震災によって破壊された街を復興し、さらに新たな都市区画整備を行う市街地復興の流れと、災害によってトラウマを負った心をケアするための、文化的な復興、文化的な復興に通じる学校再開などの教育的復興の流れの3種があったと言える。次節では、さらに文化的な側面に視野を当て、震災以前から大正期の子どもたちの遊びがどのようなものであったか、その概観を追う。

第2節 大正期の児童文化

1. 児童文芸雑誌の流行

大正期は、子どもの存在や自由な活動が認識され、教育にも子どもの個性や純真さを扱った自由主義の教育が普及した。作文教育や自由画、子どもの玩具や遊びの存在が重要視された²³⁾。児童文芸雑誌の創刊が続いたのもこの時代であり、1918（大正7）年7月、鈴木三重吉が雑誌『赤い鳥』を創刊したことがターニングポイントといえる。鈴木三重吉は創刊の数か月前に発表した「童話と童謡を創作する最初の文学的運動」という表題の文章において、現在世間に流布している少年少女の読み物や雑誌の内容が下劣だと非難している²⁴⁾。

この雑誌『赤い鳥』を中心に、児童芸術運動が展開されたことは、「はじめに」でも触れた。創刊から関東大震災発生までは、当時の文壇人に子どもたちのための作品を書かせ、児童文学に対する人びとの価値観を改めさせた。それから1927（昭和2）年の休刊に至るまでは、創作童話や童謡運動を盛り上げ、児童自由詩を定着させる。後期には児童読み物の質量を拡充し、綴方教育に強

力な影響を及ぼすまでに至った。さらに、児童画、童謡の普及にも貢献した²⁵⁾。『赤い鳥』を中心にとらえた大正期児童文学は、後世において「童心主義の文学」と呼称される²⁶⁾。この童心主義は、子どもの純真さや子どもの持つ世界観を重視するものであった。『赤い鳥』関係者のなかでは、小川未明や北原白秋といった文人たちがこれを重視していた。どちらも子ども自身の中に童心を求め、子どもの持つ天真さや、空想の世界を重んじたのである²⁷⁾。

小川未明と並び、大正期児童文学を形成した作家として浜田広介の存在が挙げられる。「泣いた赤おに」などの作品を残した浜田は、『赤い鳥』創刊の年でもある1918（大正7）年、25歳の時にコドモ社に入社し、雑誌『良友』の編集者となった²⁸⁾。翌年の1919（大正8）年にはコドモ社を退社するが、1年間で「棕鳥の夢」「光の星」「花びらの旅」「お月様と鯉の子」「一つの願い」などを次々に発表した²⁹⁾。

『赤い鳥』以外にも、『コドモノクニ』や『少年倶楽部』など、大正期は児童向け雑誌が多く登場した。こうした児童向け雑誌に掲載される内容に、当時の子どもたちが触れていたことは明らかである³⁰⁾。

2. 大正期の子どもたちの遊び

では、子どもたちは雑誌以外に、どのような遊びを行っていたのだろうか。当時の子どもたちの日記からは、石けり、おはじき、お手玉、相撲などの以前からある遊び、キャッチボールや野球、メンコ、輪回し³¹⁾など、近代に入ってから新しい遊びなど様々な遊びを行っている様子が見られる³²⁾。また、活動写真や紙芝居、サーカスの鑑賞などもあり、地藏盆や神楽、祭りへ赴くこともあった。

家庭内で遊ぶ時には、折り紙やトランプ、すごろく、絵を描くなどが主な遊びであった。玩具の種類にも変化が見られる。セルロイド製の玩具の増加、電池を使用する玩具などが登場した³³⁾。

次節ですごろくを取り扱う関係上、この節では家庭内での遊びの中でもすごろくに焦点を当てる。明治期以降、日本で発表されたすごろくは、教育目的でつくられたものや、立身出世の途上を体験するもの、政治や日本の経験した戦争をテーマにしたもの、コマを進めることで買い物ごっこをするものなど、様々な種類が登場した³⁴⁾。すごろくは、児童向け雑誌の付録として登場することも多く、『少年倶楽部』は1917（大正6）年から1926（大正15）年までの9年間で、10種類のすごろくを付録として発表している³⁵⁾。その大半がスポーツや、先にゴールへたどり着くのを目指す競争もので、第一次

世界大戦を経験してはいるが、戦争を題材にとったものは1点しかない³⁶⁾。しかしながら、『少年倶楽部』が発売部数を伸ばし、成功を収めたことで、雑誌付録としてのすごろくの普及にも大きな影響を与えたと言える。

先程見た、子どもたちの遊びの中に取り入れられていたすごろくについても見てみよう。蛭田（2015）によれば、「冒険小説双六」というすごろくでは、まさに当時の雑誌で人気のあった冒険小説さながらのタイトルが、各マス目につけられている。似たような少年向けのものとして、「世界軍人飛行双六」がある。こちらは、タイトル通り各国の軍人を取り扱っている³⁷⁾。

少女向けのものとしては、梅見やひな祭り、お花見、ままごとなど、女の子らしい遊びを題材に取った「幼女年中双六」、テニスやランニング、バレーボールなどのスポーツを題材にした「女子スポーツ双六」などがある。スポーツを題にしたすごろくは、大正期の子どもの日記でも「やきう双六」、「すごろく雪合戦」といった単語が見えることから、男女の垣根を越えて、遊ばれていたものであると考えられる³⁸⁾。

大正期の子どもたちの遊びは、伝統遊びと新しい遊びが入り混じり、児童向け雑誌の普及から雑誌を読むことなども遊びに含まれていた。当時を伺うことのできる史料、たとえば子どもたちが書いた作文、日記などからは、子どもたちの持つ童心を重んじ、尊重するべきという童心主義の潮流が見える。

第3節 「大東京復興双六」からみる未来予想図

1. 「大東京復興双六」

本章では、コドモ社の雑誌『良友』より、1925（大正14）年に新年号付録として発表された「大東京復興双六」から、どのような未来予想図を当時の子どもたちが描いていたかを考察することを目的とする。

このすごろくのイラストを担当したのは、愛知県刈谷市出身の画家、河目悌二である。子ども向け雑誌の挿絵や表紙絵などを多く手掛けており、1920（大正9）年から『良友』において口絵や表紙絵を担当していた³⁹⁾。また、編集兼発行人の木本平太郎は、1916（大正5）年に『良友』を発行した、コドモ社の創業者でもある。東京美術学校を卒業後に、図画の教師となったが、1904（明治37）年に絵雑誌のはじめとされる『お伽絵解こども』の成功に刺激を受けた。翌1905（明治38）年に『家庭教育絵ばなし』を発刊し、この雑誌が実業之日本社に移ったのを契機に、コドモ社を創立している⁴⁰⁾。

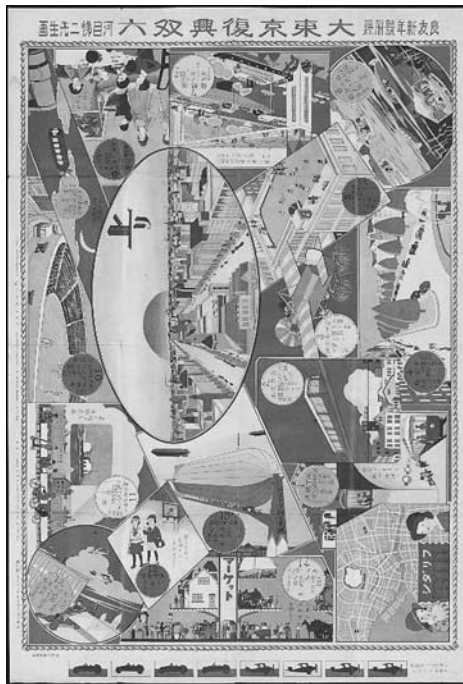


図1 大東京復興双六、540×800 mm, National Library of Austraria 所蔵、1925 年（掲載許可取得済み⁴¹⁾）

このすごろくでは、振り出しと上がりを除いたマス全てに番号が振られている。内容は以下の表のとおりである。

| 番号 | マス目タイトル | はしがき | 行き先の指示 |
|----|---------|---------------------|---|
| | フリダシ | | 1. 高架電車, 2. 屋上発着場, 3. 月世界行き, 4. 水の公園, 5. 地下鉄道, 6. 屋上プール |
| 1 | 地下鉄道 | エレヴェーターで地下鉄道へ | 2. 屋上発着場, 3. 空中散水機, 4. 水の公園, 5. 大グラウンド |
| 2 | 高架電車 | | 1, 4. 大道路, 2, 3. 白昼活動写真, 5. 回転橋, 6. 大マーケット |
| 3 | 空中散水機 | | 1, 6. ラジオで音楽, 2. 水の公園, 4, 5. 大マーケット |
| 4 | 大道路 | | 1, 6. 上り, 2, 5. 白昼活動写真, 3, 4. 月世界行き |
| 5 | 屋上プール | | 1, 4. 地下鉄道, 2, 3. 大グラウンド, 5. 懐中電話 |
| 6 | 水の公園 | | 1, 4. 屋上発着場, 2. ラジオで音楽, 3, 6. 高架電車 |
| 7 | 回転橋 | 大きな汽船が通る時グルリと橋が回ります | 一回休み 1, 5. 大マーケット, 2, 4. ラジオで音楽, 3, 6. 屋上プール |
| 8 | ラジオで音楽 | どこでも聞かれる便利なラジオ | 1, 3. 上り, 2, 6. 地下鉄道 4. 懐中電話, 5. 屋上プール |
| 9 | 月世界行き | 新発明の単軌飛行車 | 1. 大道路, 3, 5. 水の公園, 4. 高架電車 |

| | | | |
|----|--------|----------------|---|
| 10 | 大グラウンド | | 2, 5. 回転橋, 3. 乗合飛行船, 4, 6. 空中散水機 |
| 11 | 白昼活動写真 | 雲に写った活動写真 | 一回休み 1. 大道路, 2, 5. 月世界行き, 3, 4. 大マーケット |
| 12 | 屋上発着場 | | 1, 2. ラジオで音楽, 3, 5. 白昼活動写真, 4, 6. 高架電車 |
| 13 | 懐中電話 | 歩きながらお母さんとおはなし | 振り出しへ戻る |
| 14 | 大マーケット | 汽車や汽船やお家まで | 1, 5. 水の公園, 2, 4. 大グラウンド, 3. 乗合飛行船 |
| 15 | 乗合飛行船 | | 1. 上り, 2, 6. 回転橋, 3. 懐中電話 |
| | 上り | | |

振り出しと上がりを含め、全 17 マスで構成されており、サイズは縦 54 cm, 横 80 cm である。いくつかのマスには、はしがきがつけられている。

遊び方としては、さいころを振り、出目ごとに指示されたマスへ駒を置き、進めていく「飛びすごろく」と呼ばれる形式のものである。例えば、振り出しでさいころを振り、1 の出目が出ると 2 番の「高架電車」へ、6 の出目が出ると、5 番の「屋上プール」のマスへ進むことが出来る。

マスごとに書かれた、出目ごとの指定を見ていくと、ゴールへすぐに到着することが出来るマスが 3 つあることが分かる。4 番の「大道路」、8 番の「ラジオで音楽」、15 番の「乗合飛行船」である。第 3 項で詳述するが、復興計画では、街路などの設定が重要視されていた。そのため、上りに飛ぶことの出来るマスは総じて、復興後の東京の街並みや、そこで楽しむことの出来る文化活動、今後可能になるであろうと期待された技術などの、未来への展望がうかがえる内容となっている。

そして、このすごろくの描写には、復興に向かっていく東京や、子どもたちの日常の遊びをモデルとしたものと、児童向け雑誌に掲載された小説や海外文学作品の影響を受けたフィクションの 2 つがあると考えられる。次項より、考察を行う。

2. フィクション性の高い描写

最初に、フィクション性の高い描写について考察を行う。フィクション作品の影響を受けた描写のあるマスは、9 番の「月世界行き」が最も顕著だろう。

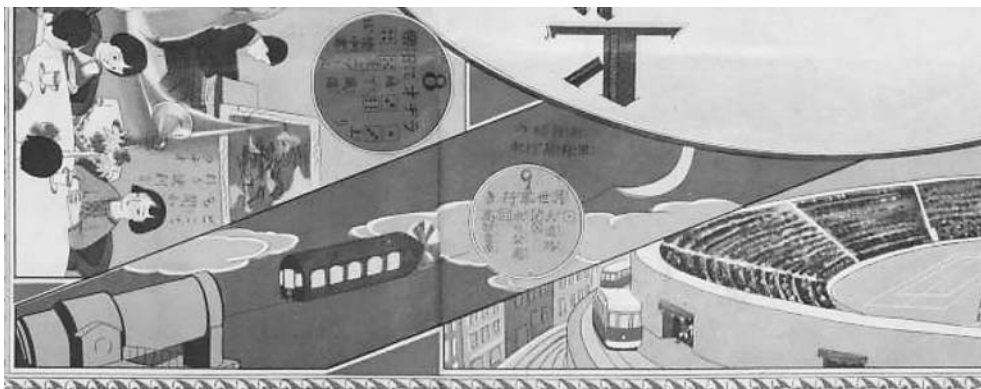


図2 「大東京復興双六」9番「月世界行き」

このマスの描写には、ジュール・ヴェルヌの『月世界旅行』を原作に、ジョルジュ・メリエスが制作した映画『月世界旅行』のイメージがあると考えられる。月に向かおうとしている乗り物（マスの中では単軌飛行車というはしがきがある）の後ろには、大砲のようなものが描かれる。メリエスの『月世界旅行』でも、月に向かう為に巨大な大砲を使用し、打ち上げるシーンがあるため、月に行くと言えば大砲で打ち上げるという決まり文句のようなものであったのだろう。

また、13番の「懐中電話」は、現在の携帯電話を予想した図とも言えるだろう。



図3 「大東京復興双六」13番「懐中電話」

少女が電話の受話器を手に持ち、家の外で家族と会話をしている様子は、電話の形こそ違えど、現在では当たり前の光景だ。しかし、外で気軽に電話を使うことができる日が来るかもしれない、という未来予想図は首都圏内外を問わず、子どもたちの心を躍らせるものだったと

考えられる。

他にも、モノレールを想起させる2番の「高架電車」や、6番の「水の公園」といった描写は、未来の技術によっていつか自分たちが目にする事の出来るようになる光景として期待を持たせただろう。他のマスで行き先の指定にも、多く見られるマスであるため、このすごろくを遊ぶ子どもたちが大人になるころには、東京はこのような未来の技術を活用した都市になっているという、期待を持たせる効果があったと考えられる。

3. 復興する街と日常の遊びをモデルとしたマス

つぎに、復興に向かう東京をモデルとした描写について考察する。1番の「地下鉄道」や4番の「大道路」、振り出しと上がりは、描かれているイラストから復興する街をモデルとした描写といえる。

鉄道の復旧については、早いところでは9月5日から運転が再開されていた。私鉄各線では、罹災者の無料乗車を実施したところもあった⁴²⁾。道路の整備については、チャールズ・ビアードから後藤新平への電報にもあったように新たな街路の整備を行い、52路線119kmにおよぶ幹線道路の整備が行われた。それだけでなく、補助線街路122路線139km、区画整理街路605kmが生み出された⁴³⁾。このとき作られた、南北方向の第1号幹線道路（昭和通り）と東西方向の第2号幹線道路（靖国通り）を十字の軸とし、不規則な格子パターンと東京駅を中心とした放射・環状道路を組み合わせた道路網が構築された。

街路事業の計画図や、昭和通りを描いた絵はがきと、振り出し、上りのそれぞれのイラストはそれぞれ似通っている部分がある⁴⁴⁾。区画整理事業を行う際は、啓発パンフレットを配布していたこともあり、絵を担当した河目悌二がこれらを参考にした可能性は十分にあり得るだろう。



図4 「大東京復興双六」フリダシ



図5 「大東京復興双六」上り

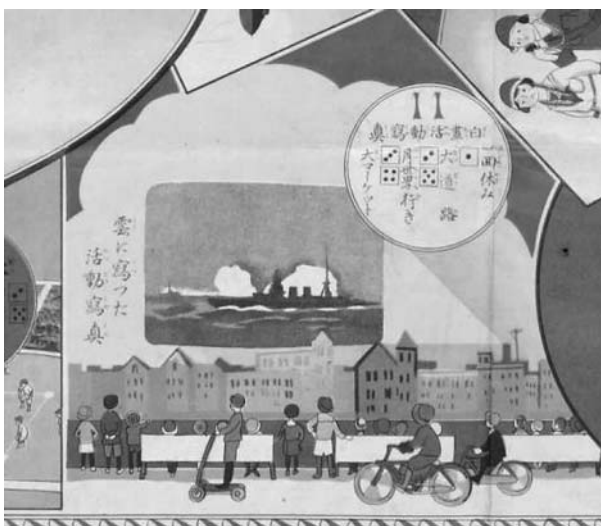


図6 「大東京復興双六」11番「白昼活動写真」

次に、子どもたちが日常行っている遊びをモデルとした描写について考察する。こちらは8番の「ラヂオで音楽」、10番の「大グラウンド」、11番の「白昼活動写真」が挙げられる。第2章でも見たように、活動写真の鑑賞は子どもたちにとっても楽しみの一つであった。11番には、暗い室内で上映される活動写真が、明るい場所で雲をスクリーン代わりに利用し、鑑賞することができる

ようになればいいという、未来予想図的な要素も加えられている。

8番と10番は、首都圏内の子どもたちであれば震災後の混乱と不安の中で、ストレスケアのために催されたレコードコンサートや、運動場の開放などが思い起こされ、首都圏外の子どもたちにも、音楽鑑賞や広い運動場で体を動かす機会を想起させることが可能である。

こうした東京をモデルにした描写は、地方で『良友』を購読している読者にも、東京の復興の様子をイメージさせるだけでなく、近代的な都市とはなにかを予想させるものにもなったであろう。

近代的な都市のイメージとしては、14番の「大マーケット」も、三越などに代表される百貨店を想起させるものだろう。しかし、汽車や汽船、家まで購入可能な百貨店となると、このマスの描写には、フィクションの要素も加えられていると考えられる。

「大東京復興双六」は、フィクション作品の描写と復興していく現実の街をモデルとした描写を織り交ぜることで、子どもたちに復興への希望を持たせる効果と、未来はこうなるだろうという予想ごっこ要素があった。すごろくという一つのゲームを遊びながら、被災経験を持つ子供たちはフィクション性のある未来予想図を楽しみつつも、復興への希望を得る。地方の子どもたちは、東京の復興をすごろくで知りながら、「月世界旅行」のように月へ行く、活動写真を外で見る、水で満たされた公園で船に乗って遊ぶといった空想ごっこで遊ぶことができた。

これらの要素には、いずれも震災で大きなストレスを受けた子どもたちが、改めて純真な心で、創作物などを楽しむことが出来るようにという期待があったのではないだろうか。先述のように、復興への希望を持たせる効果と、未来はこうなるという予想、あるいは空想ごっこ要素が、このすごろくには含まれている。

関東大震災後、子どもたちが受けたストレスに関して、横浜小学校で行われた調査結果では、地震と火事、そして朝鮮人に関するデマが、子どもたちにとって恐怖の対象となっていた。さらに、互いに助け合おう、友人と喧嘩するのをやめようなどといった前向きな意見を持つ子どもたちと対照的に、気分が落ち込む、自分自身を肯定的にみられなくなった子どもたちがいたことも明らかとなっている⁴⁵⁾。

こうした状況からも、童心主義において重要視される、子どもの持つ純真な心、あるいは想像力が欠如していたと考えられる。ある程度生活が復旧し、余裕ができたころ、この「大東京復興双六」の中に仮想現実としての東京を出現させ、さまざまな空想ごっこを行うこ

とで、失われた童心を取り戻させようとしたのではないだろうか。

それは、子どもの持つ想像力などを重視した童心主義の意にもかなうものであり、このすごろくが付録としてつけられた『良友』が童心主義の雑誌であったことから、十分に考えられることである。

当然ながら、子どもたちが描いた未来予想図が、この「大東京復興双六」の描写と全く同じものだと考えられない。製作者側の意図が、多く含まれていることは確かである。しかしこのすごろくを遊ぶことで、子どもたちが明るい気持ちを取り戻すことができれば、それは製作者である『良友』が望んだ結果であると言えるだろう。

おわりに

本稿では、まず大正期の子どもたちを取り巻く遊びの環境と、関東大震災発生から復興計画が実施されるまでの概観を把握した。震災後に発表された、子どもの純真さを重視する童心主義の雑誌の付録「大東京復興双六」からは、被災地の子どもたちと地方に住む子どもたち、両方がそれぞれの立場からこの未来予想図的要素のあるすごろくを楽しんでいたのではないかと考察した。

注

- 1) 増川宏一 (1995) 『ものと人間の文化史 79-II すごろく II』法政大学出版局
- 2) 舩田静代 (2014) 『絵双六－その起源と庶民文化』京阪奈情報教育出版社
- 3) 滑川道夫 (1961) 「童心主義児童文学における「童心」の研究」『日本文学』17巻, p.1-p.14, 2-3頁
- 4) 中央防災会議, 災害教訓の継承に関する専門調査会 (2006) 『1923 関東大震災報告書－第1編－』, 2頁
- 5) NHK ニュース 「【震災から10年】死者 行方不明者 「関連死」含め2万2000人に」, <https://www3.nhk.or.jp/news/html/20210310/k10012907171000.html>, 2021年3月10日取得
- 6) 中央防災会議, 災害教訓の継承に関する専門調査会 (2006), 155頁
- 7) 加藤理 (2012) 「関東大震災下の子どもの震災ストレスと児童文化活動」『東京成徳大学子ども学部紀要』第1号, p.1-p.16
- 8) 同上, 1-9頁
- 9) 同上, 12-15頁
- 10) 中央防災会議, 災害教訓の継承に関する専門調査会 (2006), 22-23頁
- 11) 桜井良樹 (2017) 『日本近代の歴史4 国際化時代「大正日本」』吉川弘文館, 152頁
- 12) 同上, 161-162頁

- 13) 同上, 162頁
- 14) 同上, 162-163頁
- 15) 中央防災会議, 災害教訓の継承に関する専門調査会 (2009) 『1923 関東大震災報告書－第3編－』, 17-18頁
- 16) 北原糸子 (2011) 『関東大震災の社会史』朝日新聞出版, 134頁
- 17) 同上, 292頁
- 18) 同上, 318-319頁
- 19) 同上, 320-324頁
- 20) 1922 (大正11)年に設立, 国際事務局に登録されたときは、「少年団日本連盟」という名称であった。当時の総裁は、復興政策の指揮も執った後藤新平である。
- 21) 圓入智仁 (2017) 「少年団による関東大震災後の活動－「野外少国民学校」の取り組み－」『中村学園大学・中村学園大学短期大学部 研究紀要』第49号, p.111-p.116, 112-113頁
- 22) 同上, 114頁
- 23) 蛭田道春 (2015) 「大正期における子どもの遊び生活」『大正大学研究紀要』第100輯, pp 376-406, 406-407頁
- 24) 野口存彌 (1994) 『大正児童文学－近代日本の青い窓』踏靑社, 9-10頁
- 25) 同上, 3-4頁
- 26) 同上, 5頁
- 27) 山中恒 (2010) 『戦時児童文学論－小川未明, 浜田広介, 坪田譲治に沿って』大月書店, 19-20頁
- 28) 『良友』という雑誌は、浜田広介の経歴を語る上で名前の挙がる雑誌である。小学校低学年向けの童心主義の雑誌で、1916 (大正5)年に、木本平太郎によって創刊された。国立国会図書館国際子ども図書館ホームページ「日本の子どもの文学 国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」<https://www.kodomo.go.jp/jcl/introduction/index.html> 2021年3月10日取得
- 29) 浜田広介記念館ホームページ http://hirosuke-kinenkan.jp/?page_id=77 2021年3月10日取得
- 30) 蛭田道春 (2015), 400-397頁
- 31) 鉄でできた輪や、桶にはめる「たが」を、棒で転がして遊ぶ。
- 32) 同上, 398-397頁
- 33) 同上, 401頁
- 34) 増川宏一 (1995), 256-272頁, 288-303頁, 310-314頁
- 35) 同上, 322頁
- 36) 1924 (大正13)年発表の「日東健児攻城戦双六」のみが、戦争を題材に取っている。このすごろくには、戦車や飛行機と言った当時最新鋭の兵器が登場しているが、内容はやはり他のすごろくと同じく、ゴールを先に目指す競争のものである。(木下 巴月 (2020) 「近代日本の戦争とすごろく」, 神戸学院大学大学院人間文化科学研究科修士論文 (未公開), 20頁)
- 37) 蛭田道春 (2015), 403頁
- 38) 同上, 402-397頁
- 39) 刈谷市美術館収蔵作品データベース https://jmapps.ne.jp/kariya_art/sakka_det.html?list_count=10&person_id=49 2021年3月21日取得

40) 三宅興子, 香曾我部秀幸編 (2009)『大正期の絵本・絵雑誌の研究 一少年のコレクションを通して』翰林書房, 58-59 頁

41) 大東京復興双六

<https://catalogue.nla.gov.au/Record/5714259?lookfor=Tokyo%20sugoroku&offset=3&max=183> 2019 年 12 月 10 日取得

42) 中央防災会議, 災害教訓の継承に関する専門調査会 (2009), 61-62 頁

43) 同上, 27 頁

44) 同上, 26 頁

45) 加藤理 (2012), 10-11 頁

参考文献

圓入智仁 (2017)「少年団による関東大震災後の活動-「野外少国民学校」の取り組み-」『中村学園大学・中村学園大学短期大学部 研究紀要』第 49 号, p.111-p.116

加藤理 (2012)「関東大震災下の子どもの震災ストレスと児童文化活動」『東京成徳大学子ども学部紀要』第 1 号, p.1-p.16

刈谷市美術館収蔵作品データベース

https://jmapps.ne.jp/kariya_art/sakka_det.html?list_count=10&person_id=49 2021 年 3 月 21 日取得

北原糸子 (2011)『関東大震災の社会史』朝日新聞出版

木下巴月 (2020)「近代日本の戦争とすごろく」, 神戸学院大学大学院人間文化科学研究科修士論文 (未公刊)

桜井良樹 (2017)『日本近代の歴史 4 国際化時代「大正日本」』吉川弘文館

大東京復興双六 中央防災会議, 災害教訓の継承に関する専門

調査会 (2006)『1923 関東大震災報告書-第 1 編-』

中央防災会議, 災害教訓の継承に関する専門調査会 (2009)『1923 関東大震災報告書-第 3 編-』

滑川道夫 (1961)「童心主義児童文学における「童心」の研究」『日本文学』17 卷, p.1-p.14

野口存彌 (1994)『大正児童文学-近代日本の青い窓』踏青社
浜田広介記念館ホームページ

http://hirosuke-kinenkan.jp/?page_id=77 2021 年 3 月 10 日取得

蛭田道春 (2015)「大正期における子どもの遊び生活」『大正大学研究紀要』第 100 輯, pp 376-406

増川宏一 (1995)『ものと人間の文化史 79-II すごろく II』法政大学出版局

舩田静代 (2014)『絵双六-その起源と庶民文化』京阪奈情報教育出版社

三宅興子, 香曾我部秀幸編 (2009)『大正期の絵本・絵雑誌の研究 一少年のコレクションを通して』翰林書房

山中恒 (2010)『戦時児童文学論-小川未明, 浜田広介, 坪田譲治に沿って』大月書店

National Library of Australia

<https://catalogue.nla.gov.au/Record/5714259?lookfor=Tokyo%20sugoroku&offset=3&max=183> 2019 年 12 月 10 日取得

NHK ニュース「【震災から 10 年】死者 行方不明者「関連死」含め 2 万 2000 人に」,

<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20210310/k10012907171000.html>, 2021 年 3 月 10 日取得